

# GSI Newsletter

G S J ニ ュ ー ス レ タ ー No. 23 2006/8

## Contents

産総研つくばセンター  
平成 18 年度一般公開報告  
・「つくばで火山を噴火させよう」  
・「地質図って何？」に答えて  
— 地質図ライブラリーが  
産総研一般公開に参加 —  
・地質標本館夏の特別展「美しい砂の世界」と  
産総研一般公開日における地質標本館での  
イベントなど

サマー・サイエンスキャンプ 2006 報告

国際鉱物学連合第 19 回総会  
(IMA 2006) ブース出展報告

日本第四紀学会  
2006 年創立 50 周年記念大会参加報告

日本 - パキスタン共同セミナーについて  
— パキスタンにおける飲料水のヒ素汚染  
の拡大に関わる政策的・技術的対応 —

新人紹介

スケジュール

編集後記

## 産総研つくばセンター 平成 18 年度一般公開報告

7月22日(土), 恒例となったつくばセンターの一般公開が開催されました。今年も、家族連れを中心に 5,800 名の参加があり大盛況で、地質調査総合センターもいくつかのイベントや講演等を行い、いずれも好評でした。

地質調査総合センターの取り組んだイベントの内 3 件を紹介します。

### 「つくばで火山を噴火させよう」

高田 亮, 川邊 禎久, 古川 竜太, 七山 太,  
下司 信夫, 竹内 晋吾, 及川 輝樹 (地質情報研究部門)

昨年の「アナログ実験マジックで噴火の謎を考えよう」の第 2 弾である。若手中堅研究者が参加し、各自のアイデアを持ち寄り、実験数を増やしパワーアップで、テーマも過激にして臨んだ。「つくば」には火山はないが、結果としては、大盛況であった。抽象的な実験や、電気・エネルギーといった目に見えない実験に比べて、ものが見える実験は、子供に訴える力が大きいと感じた。地球の現象を五感で感じてくれたであろう。全体の流れは、ビデオで火山噴火を見てもらい、疑問をもってもらう(写真 1)。しかし、火山の原因であるマグマは見えないし、噴火は危険だし、その規模も大きいという導入から始まる。そこで、アナログ実験といわれるマジックを紹介する。身のまわりの材料で、全体を縮小して、子供がシェフに変身してキッチンなどで実験できること強調した。世の中は数値計算が主流であるが、一般人にはブラックボックスが多すぎる。アナログ実験は、サイエンスの基礎を含んでおり、理科教育の宝庫である。



写真 1～6: 「つくばで火山を噴火させよう」の様子。

今回は、屋内で(1)～(3)の実験を、屋外で(4)～(6)の実験を実演した。(1)ゼラチンを地球に、油をマグマにみたてた、マグマの移動から割れ目噴火までを再現する実験を高田が行った。今年は応力の効果でクラックの向きが変わる実験も行った。(2)富士山の5万分の1の立体模型の上に、溶岩にみたてた、小麦粉を着色しエタノールで溶かしたアナログ溶岩を子供に流してもらう実験を、川邊が解説をしながら行った(写真2)。小さい子供にも人気の実験であった。(3)火山弾と類似した構造をもったポップコーン、炒り米、スコーンなどを作って比べる実験は、及川が行った(写真3)。まさにキッチンで、臭いも人を引きつけた。子供は食べるのに夢中になってしまった。大人には大変好評であった。(4)重曹にすし酢を混ぜて発泡させる実験は、爆発する噴火とそうでない噴火の違いを見せるもので、5mの高さにゴム栓や泡が飛ぶ。爆発前に安全区域への避難という臨場感あふれる企画と、ヘルメットにゴーグ

ルという出で立ちの竹内の演技も大変うけた(写真4)。(5)下司は、上昇する噴煙や流下する火砕流のアナロジーとして、水槽の底に設けられた火山体から泥砂を吹き出す実験を行い、観客を引きつけた(写真5)。子供が並んで実験の順番を待っていた。(6)火山体が崩壊して起こる津波の実験は、古川・七山が行った。津波というタイムリーな現象をミニチュアで見ることができたので、4mの実験水路の両側は子供で埋まった(写真6)。崩壊する火山はパチンコ玉でできていた。

今回の実験では、実験する場所が室内と野外に分かれ、まとまりに欠けてしまった。実験の性格上、野外が好ましい実験があるので、次回は、すべての実験を野外の一箇所にテントを張ってもらいたい。また、実験のビデオも、各自の実験が忙しく十分活用されなかった。実際の噴火現象を是非見てほしいので、ビデオコーナーのある休息所でも用意できたらと思う。そこに、火山地質図などを貼るのも一案である。

## 「地質図って何？」に答えて—地質図ライブラリーが産総研一般公開に参加—

中澤 都子(地質調査情報センター)

7月22日の産総研一般公開において、研究施設公開の一環としての「見学ツアー」が計画され、昨年10月公開開始した地質図ライブラリーが、「地質図ライブラリー見学ツアー」として参加しました。本ツアー実施の目的は「地質図って何？なんだか固くて難しそうな話？」などの疑問にお答えし、地質図をより身近に感じて貰おうという主旨です。特に小中学生の中から将来の地質学者が誕生してくれれば！と願って見学ツアーへの応募を決めました。科学技術一般の公開の中では、研究施設公開と銘打ったためかやはり出足が悪く、開始の10時になっても参加希望者0(ゼロ)！と暗雲立ちこめるスタートでした。でも、その後は受付での紹介、追加OKの案内看板作成などを行い、予想入場者数の74%を得て、15時の最終回(全部で5回)を終了いたしました。見学ツアーの内容としては、参加の方々に充分満足していただけたと思います。

事前準備では、大人向けと小中学生向けの2つをイメージして設定に取りかかりました。そして、展示地質図の対象地域として、日本ではつくばを中心とした関東地方を、外国ではスイスのマッターホルンを、また珍しい地図としてゴンドワナ大陸復元の地質図などを選定しました。フィールド調査の説明では、臨場感を高めようと、調査スタイル・調査グッズで身を固めた研究者に登場をお願いし、体験コーナーでは、「顕微鏡・ルーペで



写真1: 見学ツアーの様子。



写真2: 塗り絵を楽しむ子供たち。

覗く微化石の世界」「空中写真で富士山火口や活断層を立体視しよう」「ぬり絵で作る三宅島火山地質図」を準備しました。

入場者は入り口近くの展示物「1952年米軍作成関東甲信地域の“立体”地形図」にまず「お～！」。貴重な地図ではありますが、小中学生には実際に手に触れて実感してもらいました。「地形図からどのような調査作業を経て地質図を作っていくのか?」、「明治時代の地質図でのつくばは?」、「地質図の色って?」、また、新刊の全国主要活断層活動確率地図展示の前では、「次の地震

は?」など、質問が飛び交い、予定の30分をかなりオーバーするグループもありました。

今回の反省点としては、1. 地質図ライブラリー紹介イベントの参加区分を検討（見学ツアーあるいは施設公開など）、2. PR方法の改善。キャッチコピーをワクワクするようなもので、かつ具体的に（活断層がわかる、化石を手で取って見てみる、地質図ぬり絵など）する、の2点があがり、これは次回への課題となりました。

## 地質標本館夏の特別展「美しい砂の世界」と産総研一般公開日における地質標本館でのイベントなど

目代 邦康（地質標本館）

地質標本館では、7月22日の産総研一般公開の日から9月24日まで、夏の特別展「美しい砂の世界—不思議な砂・美しい砂・役に立つ砂—」を開催しています。この特別展では、日本と世界各地の76地点の砂の画像や、黄砂や液状化現象（噴砂）などの砂にまつわる地球科学現象についての解説、資源としての砂についての解説など、砂の様々な側面に焦点をあてて、ポスターによる展示を行っています。一般公開当日は、この特別展に関連した体験イベント、普及講演会、そして薄片室の見学ツアーを実施しました。

標本館館内には、新島から取り寄せた流紋岩起源の白い砂の砂場がつくられました。そこには、プラスチックのお皿に幾何学模様の穴を開けた簡易版の「砂変幻」が置かれ、多くの子供たちが遊んでいきました。「砂変幻」とは、地質調査所OBの有田正史さんが考案、作成された砂のおもちゃです。砂場の周囲には、これまでにつくられた全ての「砂変幻」が並べられ、子供から大人まで、たくさんの方が手にとって楽しんでいきました。初期作品は、幾何学模様が現れるものでしたが、最近のものは茨城をはじめとして各地の地形が出現するものです。山や湖の配置と水系の関係が読みとれる大変興味深いもので、山の高さがどのようにして決まっているのかなど、深く考えさせるものとなっています。また、古代エジプトでは、巨大な花崗岩の石柱を立てるときに、砂が使われていたと考えられています。そのしくみが理解できるミニチュア版も有田さんにより作られて、展示されました。その他、ワイングラスに鳴り砂を入れて、木の棒でつついて鳴らす体験コーナーや、液状化現象が簡単に再現できる「エキジョッカー」も多数用意され、多くの方が楽しみました。

地質標本館の玄関前では、砂を使った5種類の実験が行われました。三角州の形成実験、沈降管を使った水中での砂などの沈み方を見る実験、砂を使っての安息角の実験、ウェーブリップの形成実験、振動により砂がどのような模様をつくるかといった実験です。当初は、



写真1：水路実験の様子。



写真2：砂変幻の展示風景。

時間を限定して行われる予定だったのですが、見学者が絶えなかったため、終日実験が繰り返されました。いずれも簡単な装置を使っての実演なのですが、それぞれの現象に詳しい研究者が解説をしながら実験を見せるため、非常におもしろい実演となっていました。

薄片室のスタッフによる薄片作製の見学ツアーも実施されました。1回につき5名程度で4回行う予定でしたが、親子での参加もあり、定員を超える26名の方が参加されました。実際に稲田花崗岩の薄片を作製する工程を見学し、最後にできあがった薄片を顕微鏡で見てもらおうというものです。薄片を見たこともさわったこともない人ばかりですので、全てが驚きの連続だったようです。参加者は、もとの花崗岩の状態と、顕微鏡でみた薄片との違いに大変驚いていました。また、多くの質問が寄せられていました。

共用講堂大会議室では、上記の砂の特別展に関連して、地質標本館普及講演会として、地圏資源環境研究部門の須藤定久氏と、有田正史氏による「砂」に関する講演会が行われました。会場からは、多くの質問が寄せられ盛況のうちに終わりました。

産総研一般公開日は、1年のうちで最も来館者が多い日で、その数は1868名にもなりました。これだけの人



写真3：薄片室見学ツアーの様子。

数にもかかわらず、今回のイベントでは、実演や自分で体験できるものが多く、職員が直接語りかけるものであったため、来館者にとっては満足度の高いイベントであったと思われます。地質標本館は、この日に1980年の開館以来70万人目の来館者を迎えることができました。今後も、より多くの方に、繰り返し足を運んでもらえるような展示やイベントを作り出していきたいと考えております。

## サマー・サイエンスキャンプ2006 報告

佐藤 努（地質調査情報センター）・中川 充（北海道産学官連携センター）

日本科学技術振興財団では、「研究所に行ってみよう！」と題して、高校生を対象とした2泊3日程の先進的科学技術体験合宿プログラム「サイエンスキャンプ」を、1995年から実施しています。2006年の7・8月のプログラムは、大学・公的研究機関・民間企業の33会場で開催されました。GSJでは、北海道産学官連携センターを中心として2000年からこのプログラムに参加しており、今年のプログラムは「北海道の大地で地球上の営みを体感しよう」と題して、7月26日から28日の日程で開催されました。

今年の参加者は、高校1年生4名、2年生4名、3年生3名の計11名で、南は宮古島、北は旭川までの広い地域から集まりました。

まず26日の昼過ぎに新千歳空港に集合した後、バスで札幌市の産総研北海道センターに移動しました。同センター所長の北野さんの挨拶とセンター紹介の後、メタンハイドレート研究ラボ長の成田さんの案内で、メタンハイドレートに触ったり燃焼実験を間近に見たりしました（写真1）。ゲノムファクトリー研究部門では、官上

さんから酵母を利用したタンパク質合成の話聞き、北海道大学の北村さんから高校や大学で行う学問の違いなどの話を聞きました。創業シーズ探索研究ラボでは、清水さんの案内で産総研が世界に先駆けて開発した糖鎖自動合成装置GolgiTMの見学を行いました。最後に産学官連携センターの中川啓子さんの案内で、各実験室や遺



写真1：メタンハイドレート燃焼実験を見る参加者。

伝子組み換え植物温室などを見学し、再びバスに乗って宿泊先である支笏湖畔の休暇村支笏湖へ向かいました。

26日の夜は、まず筆者中川より北海道の火山や有珠山・昭和新山の解説を行い、続いて北海道産学官連携センターの太田さんより地質調査道具の使い方の講義がありました。さらに、サイエンスキャンプ2000の修了生でもある北海道大学大学院生の小杉さんより、サイエンスキャンプの経験から北大大学院に至るまでの勉学・研究についての話がありました。

27日は、実際に火山活動の現場に触れる機会として、昭和新山登山と有珠山2000年噴火の西山火口の見学を行いました。まず昭和新山では、山の所有者である三松三朗さんの案内で中腹まで登り、転石の観察を行いました(写真2)。昭和新山は、もともと川や麦畑であった土地がマグマの貫入によって盛り上がり、新たに山になった所です。中腹には河床堆積物や畑の下にあった有珠山の溶岩、そして貫入した昭和新山の溶岩を見ることができ、参加者はルーペを用いてこれらの岩石の違いを観察しました。続いて西山火口では、2000年に起きた噴火活動のつめ痕を見学しました。クリノメーターを用いて、マグマの貫入によって盛り上がった道路の傾きや木や建築物の傾斜を測定し、火山活動に伴う地殻変動の大きさを体感しました。いまだに噴煙を上げている火口の近くでは地熱の測定を行い、100度を超える地温に皆驚いていたようです。その後、飛んできた噴石の直撃を受けた建物や、虻田洞爺湖インターチェンジ付近の電線がゆるんだ電柱を見学しました。

27日の夜は、まず筆者佐藤より、2000年の有珠山の噴火活動に伴って電線がゆるんだり地下水が湧き出したりするメカニズムについて解説し、続いて北海道産学官



写真2：三松三朗さん(右端)の案内で昭和新山を登る参加者。

連携センターの永石さんより、太陽電池やヒートポンプによって自然エネルギーを人間が使える形に変換するしくみの話がありました。

最終日は、支笏湖ビジターセンターを見学し、同センターの瀬戸さんより野外に展示してある軽石や柱状節理などの説明がありました。その後、支笏湖畔の苔の洞門において樽前山の溶結凝灰岩や軽石、水流による岩石の侵食などを見学しました。

閉講式では、修了証書授与の後、参加者から本キャンプの感想を聞くことができました。実際に見る火山や噴火の現場に圧倒されたという意見が多く、その他にはバイオ関係の研究室やメタンハイドレートの見学に興味を持った参加者もいたようです。最後に、本キャンプを支援していただいた北海道センターの後藤さん、佐藤さん、中川啓子さん、羽坂さんに感謝いたします。

## 国際鉱物学連合第19回総会 (IMA2006) ブース出展報告

佐脇 貴幸・宝田 晋治 (地質調査情報センター)

国際鉱物学連合総会は、4年に1度開催される鉱物学・結晶学・鉱床学・岩石学一般に関する国際会議である。本年は、1970年以来、36年ぶりに日本で開催されることになり、2006年7月24日～28日の5日間にわたって、神戸国際会議場にて開催された。登録された発表は、口頭・ポスター合わせて800件以上であった。

地質調査所時代以来、産業技術総合研究所となって以降も、対外的には地質調査総合センターが日本で唯一の総合的な地質研究機関として認識されてきている。IMAのような比較的大きな国際学会において、その存在を明確にアピールすることを目的としてブース出展を行なっ

た。地質標本館を含めて4ブースを確保し、地質調査総合センターとしての概要・ミッション、各研究ユニットの概要を紹介した。また、産総研、地質調査総合センター、地質標本館の展示物紹介等の多数のパンフレットを配布した。

残念ながら、各講演会会場が地下、3階、4階、5階と分かれているのに対して展示ブースの場所がそれらの階を行き来する人の流れからやや外れた場所に位置していたため、来場者数は予想よりも少なかった。それにもかかわらず、各ユニットの最新の研究情報や地質調査総合センターの成果物の状況、特に鉱物資源図について、

強くアピールできたものと思う。また、当初予定していなかった1/100万日本地質図（CD-ROM）についての販売を急遽行ない好評を得た。以後予定しているブース展示に際しては、来場者の利便性を考え、持ち運びが手軽なCD-ROMや地質標本館で取り扱っている絵葉書等を販売するなど工夫すべきかと思われる。また、もう少しノートパソコンの台数を増やし、RIO-DBやCD-ROMの内容の実演があればよかったかもしれない。

日々の研究でお忙しい中、ポスター作成に協力していただいた方々、また会場にて来場者に対応していただいた方々に厚くお礼を申し上げる。



写真：ブース展示の様子。青木地質標本館長（左端）と話しているのは、H. Catherine W. Skinner 博士（“Geological and Health”の著者の一人）。

## 日本第四紀学会 2006 年創立 50 周年記念大会参加報告

植木 岳雪（地質情報研究部門）

日本第四紀学会 2006 年創立 50 周年記念大会が、2006 年 8 月 4 日～6 日に東京都八王子市の首都大学東京南大沢キャンパスにおいて開催されました。今回は 50 周年記念大会ということで口頭発表はなく、シンポジウムとポスター発表のみでした。シンポジウム全体のテーマは「人類の環境を第四紀学から考える ― 過去からみた現在と未来 ―」であり、8 月 4 日には、「最終間氷期から完新世への急激な環境変動と人類」、5 日には「鮮新・更新世の日本列島」、6 日には「過去の間氷期の研究から今後の地球環境の変遷を考える」、「環境問題・自然災害を第四紀学から考える」という 4 つのシンポジウムが開かれました。また、5 日には東京都立大学名誉教授町田 洋会長の記念講演が行われ、7 日～8 日には「南関東の第四紀主要サイトをめぐる」というテーマの巡検が行われました。

筆者は、4 日から 5 日の 2 つのシンポジウムとポスター発表に参加しましたが、その際に感じたことを以下に述べます。まず、通常の大大会に比べて、今回の大会のシンポジウムの聴講者数がほぼ倍の 250 名以上であったことに驚きました。最近の大大会では、地質、地形の発表が多いのですが、今回は総括的な内容のシンポジウムが行われたために、考古や古生物を専門とする参加者も多いようでした。これは、日本第四紀学会が地質学、地理学、古生物学、動物学、植物学、土壌学、人類学、考古学、地球物理学、地球化学、工学の 11 分野からなる学際的な学会であることを考えると、大変好ましいことだと思います。次に、ポスター発表が 66 件もあったことに驚

きました。これは、通常の大大会の口頭とポスターの合計発表数とほぼ同じです。また、会長講演では、現在の日本第四紀学会の問題と今後の第四紀研究の課題が示されました。特に、20 年前の創立 30 周年記念大会で提示された課題が、ほとんど残されていることに驚き、今後我々が高い意識を持って解決していかなければならないと思いました。

第四紀学は、過去を調べることによって未来を予測する学問です。現在、最も必要とされる分野ですが、必ずしも日本第四紀学会の認知度が高いわけではありません。来年の 12 月には、産総研で国際シンポジウムが行われる予定です。皆様方のご参加をおまちしています。



写真：会場の様子。

## 日本 - パキスタン共同セミナーについて

－パキスタンにおける飲料水のヒ素汚染の拡大に関わる政策的・技術的対応－

駒井 武（地圏資源環境研究部門）

2006年7月26日および27日に、産業技術総合研究所西事業所および東京工業大学社会理工学研究科において標記の共同セミナーが開催された。これまで、インドやパキスタンにおける地下水のヒ素汚染は周知されていたが、パキスタン北部のパンジャブ州を中心とする地域の汚染実態はあまり知られていない。しかし、2004年より実施した東京工業大学、愛知学院大学、パキスタン女子大学および筆者らの合同現地調査の結果、パンジャブ州のラホール地方における地下水汚染の程度が著しく、特にヒ素による発ガンなどの健康被害の事例が極めて多数見られた。このような健康被害は年々拡大する傾向にあり、地層中のヒ素の自然起源に加えて、産業活動や生活排水による人為的な原因も複合的に関与していることが示唆された。

本共同セミナーは、上記のようなパキスタン国内の飲料水による健康影響とその社会工学的な対応を主なテーマとして、パキスタンと日本の合同で開催された。7月26日および27日の両日にわたり、約20人の聴講があり、活発な意見交換があった（写真1）。パキスタン側より、パキスタン女子大学ラホール校の副学長 Dr. Mateen、同学環境科学部長の Dr. Cheema、さらにはカスール市の市民社会ネットワークの所長 Mr. Kayani の各氏をご招待した。また、日本側からは東京工業大学の坂野助教授、愛知学院大学の森下教授が来所され、それぞれの調査結果やリスクの低減措置の検討、社会的な解決策などについて貴重な講演があった。産総研からも多数が参加し、筆者はヒ素による地質汚染の健康リスクとその軽減の方策について報告した。また、地圏環境評価研究グループの Dr. Atiq Rahman（JSPS フェロー）は合同現地調査の様子をVTRで紹介した。セミナーの中で、当研究グループの地下水・土壌汚染の研究成果に関する見学会も行われた（写真2）。

セミナーでは、まず Dr. Mateen および Dr. Cheema の各氏より、パキスタン国内の飲料水汚染の疫学調査の結果、地下水や頭髮中の汚染物質濃度の分析結果などの紹介があった。また、Mr. Kayani 氏からはカスール市内における飲料水による健康被害の実態と政策的な対応に関して報告が行われた。これを受けて、森下教授よりパキスタンにおける長期間にわたる調査結果とGISを用いたマッピング手法に関する講演があった。さらに、坂野助教授からは、本課題に対する社会工学的な見地からの環境対応について具体的な提案がなされた。セミナーの最後の総括的な討論会では、真剣かつ活発な意見交換が行われ、非常に意義の深いものとなった。2日間の共

同セミナーを通して、パキスタンと日本の両国において今後も緊密な協力体制をとりつつ、実効性の高いリスク軽減の方策と社会への政策提言を行っていくことで意思の統一が図られた。なお、2回目の共同セミナーは、今秋パキスタン女子大学で開催する予定である。



写真1：共同セミナーの様子。



写真2：研究室の見学会。

## 新人紹介

### 竹村 貴人

(たけむら たかと, 地質情報研究部門)

平成 18 年 4 月 1 日より地質情報研究部門の沿岸都市地質研究グループに配属になりました。竹村貴人です。これまで、学部・修士課程で構造地質を、博士課程・助手時代に工学部建設工学科にて地盤工学・地盤力学を専門とし土質から岩盤までの地質媒体を理学・工学双方の視点から研究をしてきました。

土や岩石を初めとした地質媒体は、空隙、クラックや粒子配列など様々な内部構造を持っており、それらは地質媒体の力学・水理学的な挙動を考える上で非常に重要であることはいうまでもありません。このような地質媒体を工学的に扱う際、地質学的な知見が必要であるにもかかわらず、地質学と地盤工学との間には未だに大きな溝があるのが現状です。両分野に携わってきた経験を活かし、地質学と地盤工学との溝を埋めるべく、地質情報を積極的に取り入れた新たな枠組みの地盤工学の構築に貢献することができればと考えております。今後ともよろしくお願いたします。



## スケジュール

7月22日～9月24日	地質標本館特別展「美しい砂の世界－不思議な砂・楽しい砂・役に立つ砂－」(つくば市, <a href="http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2006/2006suna/suna.html">http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2006/2006suna/suna.html</a> )
8月27日～9月1日	第17回国際堆積学会 (17th International Sedimentological Congress 2006) (GSJ ブース出展) (福岡市, <a href="http://www.isc2006.com/">http://www.isc2006.com/</a> )
9月13～15日	2006年度日本地球化学会年会 (世田谷, <a href="http://db1.wdc-jp.com/geochem/">http://db1.wdc-jp.com/geochem/</a> )
9月15～17日	地質情報展 2006 こうち「黒潮よせるふるさとの地質」(高知市, <a href="http://www.gsj.jp/Info/event/2006/johoten_2006/index.html">http://www.gsj.jp/Info/event/2006/johoten_2006/index.html</a> )
9月16～18日	日本地質学会第113年学術大会 (高知市, <a href="http://www.geosociety.jp/2006kochi/kochi-index.html">http://www.geosociety.jp/2006kochi/kochi-index.html</a> )
9月21～22日	全地連「技術 e-フォーラム 2006」(GSJ ブース出展) (名古屋市, <a href="http://www.zenchiren.or.jp/up/info.html">http://www.zenchiren.or.jp/up/info.html</a> )
9月23～25日	日本地理学会 2006 年秋季学術大会 (浜松市, <a href="http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajg/home_J.html">http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajg/home_J.html</a> )
9月24～26日	第50回日本粘土学会討論会 (東広島市, <a href="http://wwwsoc.nii.ac.jp/cssj2/">http://wwwsoc.nii.ac.jp/cssj2/</a> )
9月26～29日	2006年度日本海洋学会秋季大会 (名古屋市, <a href="http://secure.gakkai-web.net/gakkai/jos/">http://secure.gakkai-web.net/gakkai/jos/</a> )
10月3～4日	震災対策技術展 / 自然災害対策技術展 仙台会場 ～宮城県沖地震ならびに津波への万全の対策を!!～ (仙台市, <a href="http://www.exhibitiontech.com/etec/">http://www.exhibitiontech.com/etec/</a> )
10月3日～11月12日	地質標本館特別展「人類と社会の未来をつなぐ地質時代－日本の第四紀研究 50 年－」(つくば市)
10月23～25日	日本火山学会 2006 年秋季大会 (阿蘇市, <a href="http://www.aso.vgs.kyoto-u.ac.jp/kazan2006/">http://www.aso.vgs.kyoto-u.ac.jp/kazan2006/</a> )
10月31日～11月2日	日本地震学会 2006 年秋季大会 (名古屋市, <a href="http://wwwsoc.nii.ac.jp/ssj/">http://wwwsoc.nii.ac.jp/ssj/</a> )
11月14日	地質調査総合センター第6回シンポジウム「地質情報の社会貢献を考える」(秋葉原)

このニュースレターは、地質調査総合センターのホームページでバックナンバーを含めご覧になれます。

<http://www.gsj.jp/gsjnl/index.html>

## 編集後記

岩崎 秋夫  
(地質調査情報センター)

小松左京原作の「日本沈没」が再映画化され、話題になっているようです。なぜ日本が沈没するのかというと、日本列島に沈み込むプレートの切れ端が錘になって、日本列島全体を沈没させるという設定だそうです。そこで、SMA Pの草薙 剛扮する潜水艇のパイロットが海底に爆弾を仕掛けて、錘になっているプレートの切れ端を日本列島から切り離しに行くというシナリオのようです。

もちろん、これはフィクションであって日本列島が沈没するようなことはないようです。むしろ、静かに沈没しつつあるのは、列島の上に形成されたこの国かも知れません。

さて、暑い中この間もいろいろな行事や研究集会がありました。一般公開については、特別講演や科学教養講座の模様を紹介できなかったのが残念です。他にも紙面の都合により次号掲載とした記事もありました。

ということで、夏バテも吹き飛ばせるよう、今号もボリューム一杯でお送りします。

GSJ Newsletter No.23 2006/8

発行日：2006年 8月28日

発行：独立行政法人 産業技術総合研究所  
地質調査総合センター

編集：独立行政法人 産業技術総合研究所  
地質調査情報センター

栗本 史雄 (編集長)

岩崎 秋夫 (編集担当)

志摩 あかね (デザイン・レイアウト)

〒305-8567

茨城県つくば市東1-1-1 中央第7

TEL: 029 - 861 - 3687

Fax: 029 - 861 - 3672

ホームページ：<http://www.gsj.jp/>